

新たな響き

森野 水琴

彼の耳に新たな響きが届く。

失った水琴窟すいきんくつの調べを思い出させるかのように響く。

離島の森を走っていて耳にした調べだった。

野原に出て発信源の家を発見した。

コロナの影響で走りに行けなくなり、三年ぶりに訪れたが、水琴窟の調べは聞こえなかった。

土地の人の話では、コロナの間に水琴窟の持ち主は引越したらしい。今では更地になっていて、水琴窟は土の中に埋もれているのだろう。そんな喪失感を癒すように、彼の心に新たな響き。

これからは この調べとともに生きていこう
ゆつたりと心地よく響く

何ものかが調べを乱そうとしている。

たえなる調べへの嫉妬が成せる所業であろうか。

買えない喧嘩なので、魂が震えるままに したためるに限る。

こんな時は物書きであって良かったと彼は微笑む。

書けば書くほど心がなごむ。

なごんだ心に沁みる響き。

文字と音のハーモニーを楽しもう

私たちは ののしりあうために生きているのではなく
はげましあうために生きている

怒りが昇華していくようで 好きな言葉である

悪貨が良貨を駆逐するとも 美しい言の葉を語り継ぎたい
語り継ぐことによつて 新たな命が宿っていく

やまと言葉であれ やまと歌であれ 琴線に触れる調べとなるはず

彼は書道のレッスンで、祝詞のりとを習うようになった。

神主が神前で読み上げる祝詞には、独特の言い回しがある。

まず手本として配られたのは 祓詞はらいのことばであった。

今では ひらがなで書かれる所も、万葉仮名で書かれているため、一面漢字ばかりである。

禍わざわいや穢けがれが祓はらわれてくれればとの一心で彼は書く。

家内安全の祝詞は例文を引用して、祓詞と祝詞のセットで、日に日に彼は唱えている。

こうして 新たな響きが加わった